

膀胱發毛症ニ因スル膀胱結石ニ就テ

岡山醫學專門學校附屬醫院產婦人科

藤 田 正 夫

緒 言

膀胱壁ニ發生スル皮様囊腫ガ、ソノ内容タル毛髮又ハ齒牙ヲ核トシテ結石ヲ形成スル事ハソノ報告セラルル所蓋シ多シトセズ。而シテ膀胱壁ニ發生スル皮様囊腫ヲ大別左ノ二種ニ區別スルヲ得ベク、第一ハ膀胱壁ニ原發スルモノ、第二ハ膀胱ノ近隣臓器例ヘバ卵巢皮様囊腫ガ膀胱壁ヲ穿孔シテ發育増殖シ以テ本腫瘍ヲ形成スルモノ等ナリ。而シテ此等皮様囊腫ヨリ結石ヲ形成スル事ハ容易ニ考ヘ得ル事ニシテ、現今マデノ報告ニヨレバ後者ニ屬スベキ例症ハ比較的多キモ前者ニ屬スベキ例症ハ其稀有ナリトス。

曩ニトンプソン、ボガエスキー、ル、ジュウドル及ビマルチン等ハ膀胱内ニ原發セル皮様囊腫ノ報告アルモ何レモ皆結石ノ形成ヲ伴ハズト。

吉川傳氏ハ二十八歳ノ女子ニシテ尿意頻數尿利後重ヲ主訴トスル患者ノ膀胱ヨリ臼齒ノ如キ齒牙二及ビ多クノ毛髮ヲ核トセル結石ヲ摘出セリト。而シテ生殖器ニハ何等異變ヲ認メザリシヲ以テ恐ク膀胱壁ニ原發セシモノナリト報ゼリ。鈴木喜代之助氏ハ二十七歳ノ婦人ノ毛束ヲ中心トセル約鵝卵大ノ帶黃灰白色ナル結石ヲ得、卵巢ニハ何等ノ異狀ヲ認メズ、膀胱トハ分離シ居タルガ爲フリアント氏ノ說ノ如ク皮様囊腫ノ芽胞ガ膀胱壁中ニ迷入シテ生ゼル原發性皮様囊腫ナラント云ヘリ。

其他サキセル、梅田郁藏氏、プロツクヘル及ビ高橋明氏等モ原發性皮様囊腫ト考ヘ得ルモノノ結石形成ヲ伴フモノヲ報告セリ。

藤田—膀胱發毛症ニ因スル膀胱結石ニ就テ

四五八

此所ニ注目スベキハ澁川正雄氏ノ一例ニシテ同氏ハ齒牙ヲ核トセル膀胱結石ヲ手術摘出シ、ソノ皮様囊腫ガ卵巢ヨリ波及セシニ非ザルヲ種々ノ點ヨリ説明シ恐ラク膀胱壁ニ原發セル皮様囊腫ニ因スルナラムト断定セリ。

其後同患者ハ約十年後ニ於テ死亡シ池田廉一郎博士之ヲ解剖シ其所見ニヨレバ、膀胱ハ前上方ヲ除ク外全ク膠様絨毛ノ如キ腫瘍ヲ以テ滿サレ左側子宮附屬器ハ全部膀胱ノ兩側ニ融着シテ箇々ニ鑑別シ得ズ、且腫瘍組織中ニハ骨、軟骨、腦組織、甲狀腺、粘液腺、殊ニ膀胱ノ左側下方ニ於テ囊腫變化ヲ呈セル卵巢壁ニ一部ヲ見シト、ソレ故本例ハ全ク卵巢ニ原發シ次ニ膀胱ニ穿破シタル複雜性皮様囊腫ナリト云ヘリ。

次ニ余ハ最近岡山縣病院產婦人科ニ於テ膀胱壁ニ原發シタリト考ヘ得ル皮様囊腫ノ内容タル毛髮ヲ核トシテ形成セラレタル結石ヲ得タルヲ以テ左ニコレガ病歴及ビ其所見ヲ略述セン。

患者 近〇チ〇、五十五歲(農)岡山縣赤磐郡太田村。

(既往症)

遺傳的關係トシテ何等注意スベキ事無シ。患者ハ生來健全特記スベキ疾患ヲ經驗セズ。十八歳ニシテ月華開キ爾來正規ノ經過ヲ取リ五十二歳ニテ閉止セリ。五回分娩毎常平滑ニシテ二兒ハ不明ノ疾患ニテ倒レ、他ノ三兒ハ今尙ホ健全ナリ。

本症ノ既往ヲ問フニ大正八年十月頃ヨリ尿意頻數、排尿後ノ疼痛及ビ不快感ヲ訴ヘ某内科醫ニ二三ヲ訪ヒ醫治ヲ乞ヒシガ診斷不明ナリトシ只藥劑的療法ヲ試ミラレシモ輕快セズ。大正九年三月頃ヨリ其症狀益々劇シクナリ加之坐スレバ外陰部及ビ會陰部ニ疼痛ヲ覺ユルニ至リ、且血尿及ビ不隨意尿漏ヲ訴フルニ到レリ。而シテソノ症狀ハ一弛一張シテ大正十年一月十二日患者ハ劇痛ニ堪ヘ得ズシテ本科外來ヲ訪レタリ。

手術所見

「ナルコボン、スコボラミン」一〇立方厘米ノ皮下注射、「トロバコカイン」〇〇五瓦ノ腰髓麻醉ノモト

(現症)

患者ハ體格營養共ニ中等ニシテ皮膚ハ稍蒼白、顔面稍憔悴セリ。胸部ハ虛見ナシ。下腹部ハ幾分膨脹シ壓痛ヲ訴フルモ腫瘍ハ觸知シ得ズ。

内診所見

尿道口ハ著シク發赤腫脹シ、且壓痛甚シキモ壓ニヨリ膿汁排出ヲ認メズ、腔内ニ指ヲ挿入シ腔前壁ヲ少シク壓スレバ疼痛ヲ訴フ、而シテ腔前壁ヲ隔テ膀胱部ニ異物ノ存在セルヲ思ハシメタリ。故ニ尿道口ヨリ消息子ヲ以テ膀胱内ニ挿入シタルニ移動性ナキ硬固ナル結石感ヲ觸知シ得タリ。子宮附屬器ノ所見ハ疼痛ノ爲メ觸知スルヲ得ズ。又膀胱子宮頸部瘻アリテ尿ヲ漏セルヲ知レリ。膀胱鏡検査ハ之ヲ行フコト能ハズ不取致手術ヲ行フ事トセリ。

ニ原教授執刀腔膀胱切開法ヲ行ヒタリ。先ヅ尿道外口ノ下方二糎ノ所ヨリ子宮腔部ニ到ル前腔壁ニ切開ヲ加ヘ膀胱壁ニ達シ之ニ約三糎ノ縱切開ヲナセリ。手指ヲ以テ檢スルニ結石ハ膀胱右後壁ト堅ク融着シテ移動セズ。依テ指ヲ以テソノ融着部ヲ漸次剝離シ結石全部突出ヲ碎キツツ漸ク之ヲ取り出スコトヲ得タリ。結石ノ融着部位ニハ多數ノ毛髮塊ヲナシテ重積シラレルガ爲メ出來得ル限り之ヲ取除キタリ、而シテ後充分膀胱内ヲ洗滌シテ手術ヲ終レリ。

毛髮及ビ結石ノ性状。

毛髮ハスベテ短ク長キモ四糎ヲ超エズ割合色素ニ乏シクシテ灰白黒褐色ヲ呈ス。ソノ斷面ハ略圓形ヲ呈シ多角形ナラズ。且捲縮ヲ見ズ。

結石ハ約鶏卵大ニシテ脆弱ナリ。表面粗糙ニシテソノ破砕面ヲ見ルニ數層ノ疊積ヲ示ス。帶黃灰白色ニシテソノ中ニ毛束ヲ有シテ破砕面ヨリ外方ニ表ハル。

結石ノ化學的性状ヲ知ランガ爲メ定性分析ヲ行ヒタルニ (Neubauer-Huppert; Analyse des Harns II.)

(一) 細碎セル結石ノ少部分ヲ試験管ニ入レ、鹽酸ヲ注加セシニ著明ノ炭酸瓦斯發生ヲ見ル。

(二) 細碎セル結石ニ大量ノ稀鹽酸ヲ注加シ濾過ス殘渣ノ一部ヲ白金板上ニ灼熱スルニ靑酸ノ臭氣ヲ發ス。

他ノ一部ニツキ「ムレキシード」反應ヲ行フニ強ク陽性ヲ示ス。

(三) 鹽酸溶液ニツキ次ノ檢査ヲ行フ。

(イ) 溶液ノ一部ヲ取り鹽化「バリウス」液ヲ注加スルモ認メ得ベキ沈澱ヲ生ゼズ。

(ロ) 溶液ニ「アムモニア」ヲ加ヘ強「アリカリ」性トナシ濾過シ濾液ニ「アムモニア」性銀液ヲ加フルモ沈澱ヲ生ゼズ。

又濾液ヲ蒸發シ殘渣ニ硝酸試驗ヲ施スモ陰性ニ終ル。

(ハ) 濾液ニ炭酸「ナトリウム」ヲ加ヘ沈澱ヲ生ビシメ、更ニ鹽酸ヲ加ヘ溶解シ、再ビ30%醋酸「ナトリウム」溶液ノ過剰ヲ注加シ放置スルニ沈澱ヲ生ズ、而シテ之ヲ濾過ス。殘渣ヲ「アムモニア」ニテ所置シ、更ニ醋酸ヲ加ヘ「チス

チン」ノ検査ヲ行フニ全ク陰性ニ終ル。「アムモニア」ニテ所置セシ残渣ヲ鹽酸ニ溶解シ、之ニ醋酸「ナトリウム」ヲ注加シ再ビ沈澱ヲ生ゼシメテ濾過ス。残渣ヲ灼熱シ醋酸ヲ加フルニ、炭酸ヲ發生シ溶解ス。之ニ稀酸「アムモニア」ヲ加ヘ「カルシウム」ノ多量ヲ證明ス。

濾液ノ一小部分ニ「アムモニア」ヲ加フルニ濁濁ヲ生ズ。
依ツテ次ノ検査ヲ行フ。

1. 濾液ノ一部ニ稀酸「アムモン」ヲ加フルニ稀酸「カルシウム」ノ鹽酸ニ溶解スル微細ナル白色沈澱ヲ生ズ。

2. 稀酸「アムモン」ヲ以テ完全ニ沈澱ヲ生ゼシメ加温放置シ濾液ヲ蒸發シ「アムモニア」ヲ加フルニ結晶性ノ「アムモニア」、マグネシア」ノ沈澱ヲ生ズ。

(ニ) 細碎セル結石ニ稀鹽酸ヲ加ヘ濾過シ濾液ニ「ナトロン」滴汁ヲ加ヘ強「アルカリ」性トナシ、「アムモニア」ヲ證明ス。

以上實驗ノ結果確實ニ證明シ得タルモノ次ノ如シ。

尿酸、炭酸(多量)、磷酸、「アムモニア」、「カルシウム」(多量)、「マグネシウム」

結 論

本患者ノ膀胱結石ハソノ膀胱内ニ存在セル毛髮ガ成因ヲナセルヤ論ナシ。然ラバソノ毛髮、出所ニ就キテ次ノ三ツノ場合ヲ考ヘザルベカラズ。

一、外部ヨリ尿道ヲ通ジテ陰毛ノ入り來タル場合。

二、膀胱ノ近隣臓器ノ皮様囊腫ガ之ニ癒着破壊シ、之ガ内容タル毛髮ガ核トナル場合。

三、膀胱内ノ原發性皮様囊腫ガソノ内容トスル毛髮ヨリ結石ヲ形成スル場合。

茲ニ於テ本患者ノ結石形成ニ就キテ一考スルニ第一ノ場合ハ直チニ否定シ得、即チ前記ノ如クソノ毛髮ノ性質ヨ

リ考ルモ陰毛ニ非ザルヲ語り、且カク多數ノ陰毛ガ尿道ヲ通ジテ入り來タリシトハ考ヘ能ハザル故ナリ。

又第二ノ場合モ相當セズ、即チ本患者ヲ手術後内診シタルニ卵巢其他ニ何等異狀ヲ認メ得ザリシヨリ續發性皮膚樣囊腫ニ非ズトナスヲ得。

即チ本例ハ手術及ビ内診處見等ヨリシテ、膀胱内ニ原發セル皮膚樣囊腫ガ、ソノ内容タル毛髮ヨリ結石形成ヲナシタリトスルヲ得。

而シテ膀胱壁ニ發生セル皮膚樣囊腫ノ結石ニ變化スルニハキユステル氏說ノ如ク腫瘍ガ破壊シテ結石ノ核トナルモノト、腫瘍ソノモノニ尿酸鹽等ガ沈着シ以テ結石ヲ形成スルモノトノ二ツヲ考フル事ヲ得。

本例ハ膀胱壁ニ何等腫瘍ラシキモノヲ觸知シ得ザリシ故前者即チ腫瘍ガ破壊シテ結石トナレルモノナリト考ヘ得ルナリ。

以上ヲ總括シテ考フルニ、
本例ハ膀胱内ニ原發セル皮膚樣囊腫ガ破壊シ、其ノ内容タル毛髮ガ核トナリテ結石ヲ形成セル稀有ナル例ニ屬スルモノト斷シ得可シ。

懇篤ナル御指導ヲ賜リシ恩師原博士並ニ結石分析ニ關シテ多大ノ援助ヲ與ヘラレシ醫化教室畠山氏ニ滿腔ノ謝意ヲ表シ、コノ稿ヲ終ル。

Literature.

- 1) Baecker; Ovarial Dermoid.
 - 2) 池田雅一郎；渡川學士ガ供覽セル齒科核トセル結石ヲ有セス膀胱ノテモンストラチオン 中外醫學新報 第七百七十九號
 - 3) 大條大亮；結石ヲ形成セル良性膀胱發毛症ニ就テ 岡山醫學會雜誌 第三百三十二號七百十七頁 大正六年
- 藤田—膀胱發毛症ニ因スル膀胱結石ニ就テ

4

- 4) Saniter; Durchbruch eines Dermoides in die Blase, Zeitschrift f. geb. u. Gyn. Bd. XLV, S. 386, 1901.
- 5) Schmitt; Durchbruch eines Dermoides in die Blase, Central blatt f. Gyn. S. 136, 1901.
- 6) Saxer; Beiträge von Ziegler, Bd. XXXI, S. 452, 1902.
- 7) 澁川正男; 皮様囊腫ノ内容タル歯牙ヲ核トシテ形成セシ膀胱結石ノ一症例 東京醫事新誌 第千二百三十六號二千五百八十九 明治三十四年
- 8) 鈴木喜代之助; 毛髪ヲ核トセシ膀胱結石ノ一症例 東京醫事新誌 第千四百九十九號三百七十頁 明治四十年
- 9) 高橋明; 膀胱皮様腫ノ一例 中外新報 第八百六十號九十三頁 大正五年
- 10) 吉川傳; 膀胱壁ニ生ジタル皮様囊腫ノ結石ニ變性シタル一例 研瑤會雜誌第六十二號四十九頁 明治三十七年
- 11) 吉村源四郎; 毛髪ヲ核トセシ膀胱結石ノ一例 中外醫事新報第七百八十四號千五百十三頁 大正六年
- 12) Zuckerkands; Handbuch der Urologie, Bd. II, 1904.